

第10回奈良 ESD 連続セミナー

大西 浩明

◇日時：2026年1月20日（火）19時～21時

◇方法：Zoomによるオンライン形式

◇参加者：41名

◇内容：学習指導案の相互検討③

【ルーム1】 ファシリテーター：阪本さゆり（奈良保育学院）、長谷川かおり（奈良教育大学）

1) 荒井梨菜先生(奈良教育大学附属こども園) 3歳児 「ひつつき もつつき」

6月実施 自分から「〇〇したい」と園の生活に意欲的になってきた時期

どのようにしたら上手く引っ付くことができるか考えながら遊ぶ

歌やリズムに合わせて体を動かしながら、友達や保育者と触れ合う活動

どこをくっつけるか（手、背中、足の裏など）を子ども自身が自由に考える

くっつく部位を少しずつ難しくすることで、遊びが発展し、挑戦する気持ちも引き出せる

ふれあいの楽しさ、他者との関係の心地よさ

意見交流から

- ・3歳児の親子活動にはとてもいい活動だと思う。（特に初めて子育てされる親には）
- ・恥ずかしかって積極的に自分から行けない子はいないのか？
→3歳の6月でここまでできるのは、2歳児から進級している子が核となっているからかも。
- ・折に触れて1年中やってもいい活動だと思う。
- ・ふだんの保育をESDの視点で見たときに、「ESDとしての保育」が見えてくる。

2) 川井桃佳先生(滋賀県草津市立老上こども園) 3歳児 「おがくず粘土で遊ぼう」

米粉粘土、もち粉粘土、油粘土を使った遊びを経験してきている

おがくず粘土で遊ぶことで、今までとは違った感触、匂いや味わいを楽しむ

何度も形を変えて遊んでほしい 作品は作品棚に飾れるようにする

しばらくすると固まるので、その不思議さを感じてほしい

おがくずという不要なものも生活に生かすことができる（再資源化）

意見交流から

- ・おがくずに水のりを混ぜる。（混ぜる分量が難しい） 販売されているものもある。
- ・小麦アレルギーの子がいて、小麦粉粘土ができない。→ おがくず粘土を見つけた。
- ・計画では8時間だが、途中をスリム化すればもう少し短い時間でできるかも。
- ・おがくず粘土はあまり知られていないので、教材についてのところに説明してほしい。
- ・粘土のなる前のおがくずに触れる活動も大事なのでは。そこは入れたい。
- ・おがくずができる工程があっても。（木を切る、穴をあける）

【ルーム2】 ファシリテーター：河野晋也（奈良教育大学）

1) 鶴木明日香先生(福岡市立室見小学校)

小学校6年 総合的な学習の時間「チャレンジマイドリーム」

キャリア教育の指導案。

自己理解を深めることを通して、自分らしいあり方や将来の生き方を考えることをねらいとしている。実際に社会で活躍されている人（企業）や保護者（おやじの会）の話を聞き、働くことの楽しさや難しさなどを学んでいく。キャリア教育においては自己理解がとても重要になると思われる。それを踏まえて、これからの在り方を考えることになるので、自己を振り返る時間を設定することが重要だとの意見があった。

また、ネット上で利用可能な「職業診断」を使用することについて、質問に答えていく過程で自分に対して改めて問い直すきっかけとなる一方で、自らキャリアをつくっていくのではなく、他者に適・不適を判断されることから利用には十分留意しなければならないことが話された。

2)丸山清史先生(三郷町立三郷中学校)

中学校 道徳（自然愛護）『ソーセージ』の悲しい最期』

観光客の安易な行動で人馴れし、街に出てくるようになり、最終的に駆除された通称「ソーセージ」と呼ばれる熊のエピソードを通して、持続可能な社会の形成に関する私たちの行動について考えさせる。ふとした人の行動が野生生物にどのような影響を与えるのか、知らないことが怖いことであり、正しく知ることが大切であることを感じさせたい。

そのための手立てとして、単元の導入において、近年のクマのニュース、アーバンベアの問題について考えさせることで、自分も生物との共存を妨げる要因をつくり出しかねないことを気づかせることもよいのではないかとの意見が出た。

1 主題 1 時間ではなく、2 時間計画の道徳であるが、2 時間目に野生生物との共存ではなく環境問題に展開しているので、1 時間目をふまえた野生生物との共存について深める 2 時間目にするという代案が出された。

3)加地優太さん(数学教育専修3回生)

中学校1年 総合的な学習の時間「ふぞろい野菜から見るフードロス」

不揃いであるだけで廃棄される野菜に着目し、フードロスの問題を考える授業案。

フードロスの問題は日本ではとても重要なテーマであり、良い視点だと感想が出た。

また食品の購入は中学生が日常的にすることではないので、自分たちが学ぶだけでなく、保護者や地域の方に見てもらえる機会を設定していることは良い取り組みであるとの感想が出た。

意見としては、ゲストティーチャーとして農家やお店の方に話を聞く場面もあるので、野菜を使ったフードライブについて取り上げるというアイデアも取り入れられるのではないかとの意見が出た。また、不揃い野菜が廃棄するのは農家や商店であるが、なぜそれらが廃棄されるのかを追究していくと、消費者が選ばないということ、つまり自分たちの考え方を改善していくことが必要であり、自身の生活スタイルや価値観をクリティカルに捉え直しさせることが重要であるとの意見が出た。

【ルーム3】 ファシリテーター：圓山裕史（奈良市立伏見小学校）

1)勝田南美(国語教育専修3回生)

小学校6年 国語科「古代に生きた人々といまに生きる私たち～『古事記』のなかの人と自然～」

教材観：『古事記』日本最古の書物であり、自然現象と人々の暮らしを物語として継承しているものであるという説がある。その『古事記』から新たな教育的価値や可能性を探ることができるのではないか。

取り上げるのは、「天の岩戸」と「ヤマタノオロチ」。「天の岩戸」は太陽が隠れるという自然現象に対して、神様の仕業として、舞や雅楽の奉納などで祈ったり、お祭りをしたりすることで向き合っていた。「ヤマタノオロチ」は洪水という自然災害に対する対応としての話である。

そういった話に触れ、現代の自然災害や環境問題について伝えるような物語をつくる。物語を作る際には、個人では難しい児童もいるだろうという考えから、グループ活動にしている。

意見交流から

- ・国語科として物語はもちろん、漫画や絵本などでも「表現する」ということが大事である。
- ・他教科ともつながっていていいが、「神様」という話で宗教的な見方をされる心配。→宗教教育とはならないように配慮する。また、昔話として神様が出てくる程度であり、宗教教育ではないと返せるのではないか。
- ・小学校6年生の教科書に『古事記』が取り扱われているのか？→現行の教科書をすべて確認していないが、6年生の教科書にはなく、低学年で「いなばの白うさぎ」はあるのではないか。
- ・人と関わらせたいという思いから、ゲストティーチャーから学ぶ時間を設定されているが、国語科としてではなく、総合的な学習の時間として行う方がいいのではとも発信として、災害対策センターの人に見てもらったり、地域の幼稚園などに読み聞かせたりといった方向もいいのかもかもしれない。

2)黒柳新奈さん(英語教育専修4回生)

高校3年 総合的な探究の時間「私たちの身の周りにおける差別や偏見」

自分の留学時のいじめや差別を受けた経験から、このような実践を行いたいと考えている。

トランプ大統領の性別に関する発言を取り上げたり、身の回りにおける差別的意識や偏見について当たり前と思わずに考えたりすることをスタートとし、国や性についてなど偏見や差別の意識が生まれた原因について考える。さらに実際にいじめや差別を受けた人へのインタビューを通して、今後の課題について自分たちにできる活動を行動化するところまで持っていきたい。

意見交流から

- ・アメリカ留学時の実体験を差し支えなければ聞きたい。→アジア人差別と思われる態度や、同じ留学生からも嫉妬の感情からと思われるいじめを受けた。
- ・実習時に現状を受け入れてしまっている高校生と感じたのはどんなことがあったか？→道徳の人権的な内容の授業の中で、「おかしい」と思うようなことが生徒からなかなか出てこず、女性専用車両などの具体的な例を出してあげないと出てこなかった。意識下で現状を受け入れてしまっていると感じた。
- ・自分も日常の中で偏見をもっていたり、悪気なく発言したりしていることもあると思う。そういった日常の中にある偏見に目を向けることが大事なのではないかと思った。
- ・自分がされた時の対処も学べるといいなと思った。

3)詫間菜月子先生(福岡市立小呂小中学校) 中学校1年 理科「溶解度と再結晶」

対象学年は女子生徒2名であるが、友達と一緒に考えることを「楽しい」と感じており、いろいろな考え方を共有できることにメリットを見出している。互いに観察・実験中には声を掛け合い、「ともに学ぶ喜び」に重点を置いて行いたい。

塩化ナトリウムと硝酸カリウムの再結晶化が温度によって結晶の析出の仕方が違うことに気づき、溶解度のグラフを読み取ることで考察する。そして日常生活との関わりの例として、食塩などの食卓にある物質や精製所の動画を用いて紹介する。

意見交流から

- ・海水から食塩を取り出すこと自体は生活に関わってくるが、小呂島の日常とつなげるために工夫が必要なのではないか。例えば海水から結晶化させた塩の結晶と塩化ナトリウム水溶液から取り出した結晶を見比べて、後者はきれいな四角形であるが、前者は他にもいろんなミネラル分を含んでいてちがう形になることや、小呂のきれいな海からとれる天然塩にはどんなミネラル分が含まれているのか、他地域との違いはあるかなどを見ていくことで、小呂の海に目が向き、自然環境の保全に意識が向くのではないか。
- ・2名でもお互いの意見交換を大切にしているのがいい。SSHである青翔高校でもそれは同じように大切にしている。

【ルーム4】 ファシリテーター：中澤静男（奈良教育大学）

1) 芝田椋伍さん(社会科教育専修3回生)

中学校3年 社会科(公民的分野)「現代の民主政治」

- ・選挙の歴史：教科書等を用いて選挙権獲得の歴史を学ぶ
選挙についてのイメージを交流する（プラスイメージ・マイナスイメージ）
なぜ、選挙が必要になったのか。
多数決の原理、少数意見の尊重など選挙が民主主義を支えるものであることを理解する
- ・選挙について調べる→グループ発表
日本の選挙の実施方法と関係する法律
選挙の海外との比較
- ・模擬選挙の開催：奈良市の市長を決める模擬選挙を実施する
生成AIを用いて、3人の候補者の主張を準備する
今の段階で自分の考えや価値観にあう候補に投票する
- ・模擬選挙の振り返り
なぜその候補に投票したのか意見交流する
- ・選挙の現状を知る→低下する投票率
より多くの人投票するようになるには社会科が変わらなければならない
→自分たちにできること
→自分が取り組んでいきたいことを「行動宣言」にまとめる

意見交流から

- ・政治教育で公平性を担保するのは難しい
- ・生成AIで候補者の主張を作成するのは面白い。ただ、プロンプトの出し方に注意が必要
党名は出さない どのような市にしてほしいのかをアンケートしてみるのもいい
- ・11月に実施する生徒会選挙と関連付けてはどうか
- ・最近の子どもには選挙に興味のある子が多い傾向にあると感じる。大人世代とズレがある。

2) 作見優樹先生(福岡市立小呂中学校) 中学校1年 数学科「データの活用」

小呂島の水道使用量を教材に、身近な水の使われ方への関心を高めるとともに、データを度数分布表に整理する学習を通して、データを読み取る力や考える力を高める。

- ・ルーラーキャッチを通して、2つのデータを比較する方法を学ぶ

どちらの記録が反応が速いといえるか

着目する数値：最大値，最小値，範囲，分布の理解

- ・度数分布表への整理

階級値について学ぶ、ヒストグラムや度数折れ線を書き、データの傾向を読み取る。

- ・相対度数，累積度数，累積相対度数について学び，2つの集団の傾向を比べる

「相対」と「比較」の結び付け

「割合」や「蓄積」の意味を理解し、データを「数」ではなく「割合」「範囲」として捉える。

- ・実験を行い、確率の必要性和意味を理解し、不確定な事象の起こりやすさの傾向を読み取る。

- ・スプレッドシートの使い方を学ぶ。

- ・「令和6年度小呂島地区簡易水道配水量年表」から、浄水量と生産水量，配水量に着目し、月毎のヒストグラムを作りデータの傾向を読み取る。

- ・他の情報の収集・整理を行い、読み取ったことを説明する。

意見交流から

- ・小呂島という離島における水使用量の教材化は、身近であるとともに切実感がある。

- ・生徒が2名と少ないので、福岡市のデータと比較するのもいい。

- ・生徒の反応は予想通りであったか。

海水から作る水と雨水から作る水があるが、1～3月は少雨であった。→ 節水の張り紙の活用
節水の張り紙から単元に入るのもよいのでは

3)小南舞桜さん(社会科教育専修3回生)

小学校6年 総合的な学習の時間「白檀ニュータウンの未来」

白檀児童センターの歴史からまちの移り変わりを把握する

白檀南幼稚園 → 白檀南小と北小の統合・児童センターへ → 子育て支援センターへ

1967年から団地開発が始まる。児童数の増加 → 人口減少

今後も人口は減少し続けるかもしれない

- ・白檀ニュータウンの未来を予想しよう

北小と南小が統合し、白檀小学校になったときに、新しい校歌がつくられている。

校歌に込められた思いを読み取る。

校歌の歌詞に入れたいフレーズを白檀北・南小学校の児童、白檀中学校区の住民から募集し、参考資料として使用し、それをもとにした歌詞を白檀中学校区出身者から募集した。作曲は奈良教育大学学長の宮下俊也氏が手掛けた。

- ・町を大切に思う心を育てる。

- ・住み続けることができる町にするために自分にできることを考え、行動する。

独居老人との交流、子どものためのお祭りを企画、団地に絵を描いたり、飾ったり、夏祭りの花火大会など。

意見交流から

- ・発信が大きすぎ、外部との交渉・連携の労力が大きすぎる。単発的なイベントだけでなく、地道な活動を考慮する。

- ・新しい校歌を導入で紹介し、歌詞に込められた願いと現実を比較するために、足を使った調べ学習ができる。そのうえで、地域社会の課題や価値を把握し、自分にできることを考えた方がよい。

【ルーム5】 ファシリテーター：阿部大輔（山形大学教職大学院）

1) 上園弘太郎先生(鹿児島県鹿屋市立鹿屋小学校)

小学校5年 総合的な学習の時間「わたしたちの食といのちをつなぐプロジェクト」

- ・5年生の米づくりについての実践。地域の食べ物や学校の給食がおいしい。
- ・上園先生の悩み、課題 → アイデアはいろいろあるがうまくできないこともあること。
- ・みんなちがってみんないいという認め合える雰囲気がよいところではあるが、みんなが同じことをできない、集合できないといった子ども達の一面もある。
- ・米作りを通して地域の方から思いを聞く。農業高校の米づくりの工夫を聞く。その中で学んでいく。
- ・代掻き体験 タニシ 五感で気付き 稲が生長 ジャンボタニシに食べられているから何で農薬を使わないのだろうという思いを子どもにもってもらいたいと考えた。
- ・農業高校の生徒から学校に来てもらい、授業をした。虫やカナヘビの餌がなくなる、農薬をつかわないことは環境を守ることに繋がるという話をしてもらった。
- ・保護者には農薬つかってもいいと考える人もいるため、一方的な否定にならないように気をつける必要がある。
- ・高校生の探究について知ることができた。藁 燃えたら地球温暖化につながる あまった藁で何か作れないかな
- ・収穫後 子ども達は食べ比べをしたい。おいしいという感想が欲しかったが、お米が焦げてしまった。あんまり味変わらないじゃないか。だったら無農薬の米は味が変わらないのに値段が違うのか。
- ・売れ残り。どうやったらお米の魅力を知ってもらえるのか。ポスターでしらせる。

KANOYA RICE EXPO (おにぎりパーティー)

意見交流から

- ・米農家さんの実際を知ること、次の世代に米作りを繋いでいくのかを考えることができる
- ・先祖代々の歴史を知ることができる。
- ・後継者の話 結果 無力感で終わってしまう 進路にもかかわる
- ・最後はどうするのか → 最後は「食べる」でしめたい 保護者 地域の人を食べる
「食べる」で終わらずに 地域の人にも伝えたい それをかねての発表会
- ・カリキュラムの組み方が難しい
一連の流れ 総合化へ なのはなプロジェクト できること 企業 観光

2) 齋藤夢月先生(山形市立第十中学校) 中学校2年 総合的な学習の時間「町づくり 福祉」

- ・社会人って何？を子ども達と考える
- ・ゲストティーチャー 自分が選んだ講師の話を聞く
- ・未来のことについて考える SDGs と社会人って何？へ
- ・山形版のSDGsカードの使用
- ・総合学習 なかなか時間がとられていない 学年200名 行動化は難しい
→特活に絡めることでできることがあるのではないか
- ・体育祭 誰でも楽しめる種目 自分たちで0から作る それで終わらずに SDGsのゴールとどのように絡んでいたか。1度行動化した後に社会人講話を設けるようにした
- ・テラステラス ポーチェ 医療的ケア児 地域の居場所 現在建設中 それにかかわる
- ・地域に触れ合う お互いに大事にしたいことがマッチングする

- ・山形ユース基地をつくろう 中学生の居場所にするためにはどのようなことができるだろう
- ・生徒会選挙 自分達の生徒会活動をSDGsに絡める 当選 生徒会の取り組みとして何かできないか

意見交流から

- ・具体的にどんな取り組みをしているのか
→体育祭 実行委員 どういう種目になったのか アイシェード 多種目 自分たちで考える 目が見えない人
足が不自由な人も楽しめる 社教から借りてきた 問いが連続している 子ども達がこう思うかなあと予想していた 行動化 高校生と絡んだ 今は点 いつから線 面になるのか
- ・生徒会執行部だけでなく、全生徒を巻き込むためにとった取り組みがあるのではないか
→各クラスから2人選出し、運動会についての話し合いを進めた
- ・ESDの見方・考え方、価値観の項目を多く掲げているので、あえて焦点化し、ねらいを絞ることでフィールドを狭くすることで学びを深められるのではないか
- ・学生目線でこのような職業についての話を聞くことができる機会が中学校時代に経験できることに価値がある

3)山下恵さん(音楽教育専修4回生)

小学校第3学年 理科「音を作る、未来をつなぐ ―グラスハーブで広がる音とものひみつ―」

グラスハーブ 水に入れる量によって音の高さが変わる

振動 小学校3年生 ものが震えているという感覚

資源に着目させ、プラスチックのグラスをあつかうことで 大切に扱うことにも気づかせることができるのではないか

音楽的な視点 1人一音 合奏 大きな栗の木の下で 水不足 入れ込んだ ドレミファソラシド全部の音が出る

単元の前半は理科、後半は音楽で考えている 5限目から音楽 歌を歌う 音のチューニング 体験を大切にしたい ジュース 牛乳 プラスチック 炭酸 なんでもこうなった

意見交流から

- ・理科と音楽を扱うことが魅力的。
- ・スムーズな流れではあるが、どっちメインでもっていくのか悩んでいる。
- ・社会のゴミについても扱えそう。
- ・教科横断型 理科 音楽 枠組みをつくるのが悲しい。
- ・生活の中から子ども達が自然と入っていきける。
- ・ゲストティーの活用
- ・「理科やってたら音楽だったら」はおもしろい。 あえて教科を決めずに実践してもおもしろそう。

【ルーム6】 ファシリテーター：大西浩明（奈良教育大学）

1)溝田友気先生(福岡市立小呂小中学校) 中学校1年 社会科(地理分野) 「北アメリカ州」

「大量生産・大量消費」に気付かせたいが、島の子にはイメージできない

経済発展と環境問題に関する視点を、身近な大国アメリカを題材に考えさせる

便利さとともにデメリットがあることに気付く → デメリットを減らす方策を考える

「アメリカ型社会」の持続可能性と改善案について考える

意見交流から

- ・グローバルな視点での「豊かさ」に気付かせるのがいい。日本の公害問題にも通じる。
- ・「アメリカ=すごい」だけのイメージを壊せると思う。
- ・島との比較で考えさせているのが面白いと感じる。
- ・この学習を発展させて、総合で島おこしに取り組んでいる。カリマネで工夫したい。

2)高川妃美樹先生(福岡市立東吉塚小学校)

小学校3年 総合的な学習の時間「東吉塚探検隊『私たちと吉塚に住む外国の人々』」

外国の方が多く住む地域 「吉塚リトルアジアマーケット」地元の商店街

外国の方たちの困っていることは？ それに対して自分たちにできることは？

リトルアジアマーケットを作った方をGTに 「外国の方を助けたい、共生したい」

「愛和外語学院」に通う外国の方と交流

→ 日本語が難しい、ごみの出し方が分からない・・・ 自分たちが表現物を作成する
外国の方たちだけでいい？ 地域の人たちみんなとともに生きていくには？

「みんなが助け合う町にするためには、私たちにどんなことができるだろう？」

意見交流から

- ・人との出会いを通して子どもの考えがどんどん変容している。人との出会いが大事。
- ・学級に外国籍の子がいるのは当たり前なので、どう共生していくかが大事になる。
- ・外国の方への取組から、地域全体への取組に広がっていくところが重要なのかと感じる。
- ・「助けてあげたい」も悪くないが、「いっしょに生きていくためには」という視点を大事にしたい。

3)金谷双葉さん(教職大学院 M2) 中学校3年 音楽科「世界をつなぐ音ー平和を伝える『鐘』ー」

合唱曲「HEIWAの鐘」(仲里幸広作曲) 「鐘」(ラフマニノフ作曲)を題材に

「HEIWAの鐘」なぜこのタイトルなのか、歌詞や曲想を手がかりに鐘の意味や役割について考える
身の回りにある鐘・・・チャイム、お寺の鐘など

東大寺の鐘、広島「平和の鐘」 鐘が時代や場所によって違う役割や意味をもっている

ラフマニノフの「鐘」鑑賞 鐘が文化や宗教、歴史と深く結びついている

「HEIWAの鐘」の歌詞を読み返し、自分たちの中にある「平和」について考える → 合唱発表

意見交流から

- ・鐘のもつ光と影の部分を考えるというのは新しい視点。合唱に生かせると思う。
- ・音楽の授業の中に様々な視点があり、教材研究の深さを感じる。
- ・ゲストティーチャーがどこかで入ると、さらに深い学びにつながるのでは。
鐘について新たな視点を与えてもらったり、広島の鐘の意味を教えてもらったり。
- ・鐘の響き一つで、勇気や畏れも感じる。聞いたときに何かしら感情が生まれる。奥深い題材。

【ルーム7】 ファシリテーター：中澤哲也(大和郡山市立片桐西小学校)

1)光延ひなたさん(家庭科教育専修3回生)

小学校6年 家庭科「災害時の食生活ー自分たちが家庭や地域のためにできることー」

- ・防災クッキング、パンフレットを作成したい。

- ・パンフレットの目的は、学習のまとめとして自分たちでふりかえるのと、地域の人たちに配布して地域とのつながりを深めるようにしたい。
- ・調理はガス火を使う？ 実際には、学校ではプロパンガスがメイン。
- ・家庭科では啓発活動はいらない。目的は自分の生活に落とし込むことが大切。
- ・パンフレットではなく手元に残しておいてもらえるカードのようなものはどうか。
- ・総合とも十分絡められる。
- ・アレルギーに関しては、作るのと食べるのは別に考えてもいい。
- ・アレルギー成分も一緒に考えられるようにしたい。

2)池本翔真さん(教職大学院 M1)

小学校5年 社会科「これからの食料生産とわたしたちの食」

- ・子どもと食料生産をつなげるために、地産地消をキーワードにした。
- ・地元の産地直売所を取り上げる。
- ・実際に子どもたちがお店に行き、生産者の思いを聞くことがよかった。
- ・学習問題②の「安心」の捉えは？→「安全」？とも言い切れるのかな。
- ・農薬を使っている野菜は本当に安全なのだろうか。学校では実際に扱いにくい。
- ・地産地消は本当に ESD なのか？授業者のバイアスがかかっているのではないか。
- ・身土不二の考え方を大事にしている。

3)高川翼先生(福岡市立姪浜中学校)

中学校3年 数学科「データで見つける地域の課題と未来」

- ・市のごみのリサイクル率を標本調査
- ・「協働」みんなを高めていく意識をもつ。
- ・ペットボトルキャップを集めるのは最近やめていっているのはなぜか。その背景を見るのが ESD として大事。
- ・子どもたちがやりたいと思っていることを大切にされた。
- ・標本調査ができれば、総合や探究にもつながっていくことができる。技能として身につけさせたい。
- ・数値で見られるよさもある。
- ・標本調査＝推定値
- ・ペットボトルキャップ集めは本当にエコなんだろうか。
- ・算数、数学は教科をこえることが難しい。落としどころが教科的な所で落ちにくい。
- ・標本調査をどういう風に表すのがわかりやすいのか、伝わりやすいのかを教科として落としどころになるのではないだろうか。
- ・教科書などの問題ではなく、実際に自分たちの生活に結び付けて考えるのは深い学びにつながる。
- ・期待する数値になるようにするには、自分たちの行動をどう変えればいいのか考えるのもおもしろいかもしれない。
- ・各自のタブレットを活用していることもある。